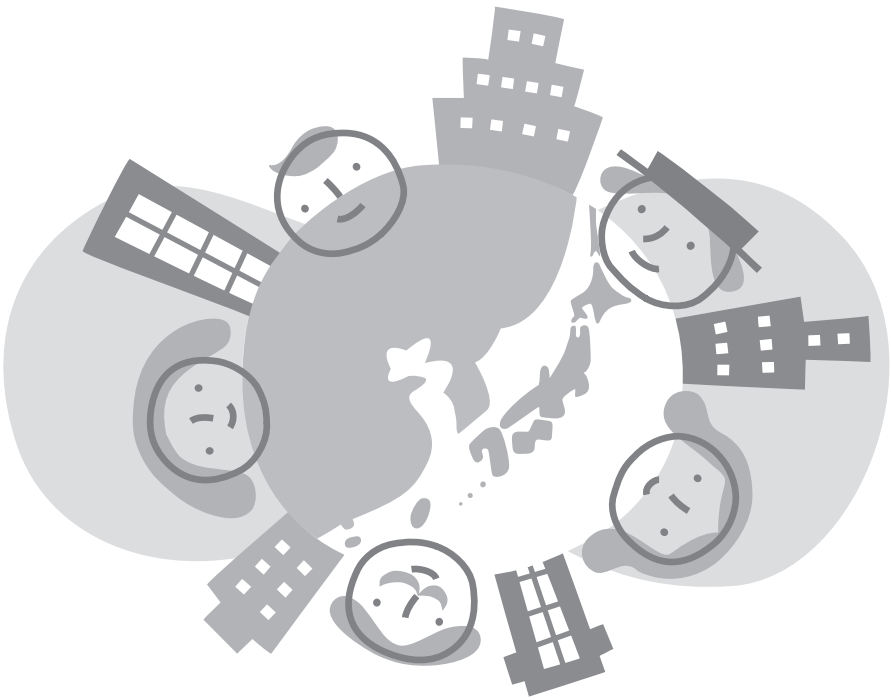
PART 2

各都市の調査結果の特徴

李　基淑（ソウル）
張　燕（北　京）
朱　家雄（上　海）
蔡　春美（台　北）



1

ソウルの結果と分析

李　基淑（梨花女子大学校幼児教育学科教授）

１．調査対象となる幼児の一般生活の背景

（１）一般的な背景と基本生活実態

ソウル市と京畿道の韓国の首都圏にある幼稚園と保育施設の計31か所に通う３～６歳の幼児から回収された941人を対象として幼児の生活の実態について分析した。

本調査の調査対象となった幼児たちは、男子と女子の割合がそれぞれ半数であり、幼稚園と保育施設にそれぞれ41.3%、57.5%が就園している。調査票の大部分は幼児の母親が回答し（92.4%）、第１子は60.9%で、きょうだい数は２人が65.3%だった（p. 8 図Ａ－３～５、p. 9 図Ｂ－１）。

両親の年齢は大部分が30代で、父親の場合、「36～40歳」が42.6%、「31～35歳」が38.1%だった。母親の年齢は「31～35歳」が56.7%で最も多く、次いで「36～40歳」が24.7%だった。父親の学歴は四年制大学卒業が46.7%で最も多く、母親の学歴は高等学校卒業が38.8%、短期大学卒業以上（「短期大学」＋「四年制大学」＋「大学院」）が58.2%だった（p.10 図Ｂ－２～３、p.11 表Ｂ－２～３）。

家族構成は核家族が全体の71.1%であり、母親の職業は「専業主婦」が50.8%で、「常勤（フルタイム）」「パートタイム」「フリー（在宅ワークを含む）」などの職業を持っている母親は合計で38.7%だった。常勤やパートタイムで働いている母親の労働日数は「週５日」が38.5%、「週６日」が38.7%で、大部分が週５、６日勤務である。就業している母親の場合、午後６時に帰宅する母親が23.6%で、午後７時に帰宅する母親も14.3%いた（p.11 表Ｃ－１、p.10 表Ｂ－１、p.175 基礎集計表）。

また、家でインターネットを１週間に５日以上使う保護者が30.3%で最も多かった（p.11 図Ｃ－１）。少なくともインターネットを１週間に１回以上使う家族は78.6%にのぼる。これは韓国の超高速インターネットの普及率がOECD諸国の中で第１位を占めていることを反映したもので、現代の韓国社会でのインターネット使用は、家庭生活でもなくてはならないものになっている。また、家族の平均月収は、「201～300万ウォン」の家庭が24.2%、「301～400万ウォン」の家庭が23.2%、「101～200万ウォン」の家庭が14.0%であった（p.183 基礎集計表）。都市部の平均月収が2005年度の第１四半期現在で3,291,216ウォン（韓国統計庁）であることを考えると、サンプルではかなり平均して分布しているといえる。

幼児は、大部分が「７時半～８時頃」の間に起き（61.8%）、「８時～８時半頃」に朝食を食べ（62.9%）、「19時～19時半頃」に夕食を食べ（60.3%）、「21時半～22時頃」に就寝している（50.2%）。このように幼児の就寝時刻が「22時頃」以降の場合が全体の61.7%

で、「23時頃」以降の場合（16.9%）も相当数あった（p.46 図1－1－1、p.47 図1－1－3～6）。

（2）早期教育の実情

幼児の中で72.6%が課外活動（習い事）をしており、とくに年齢が高くなるほど課外活動をする比率が高くなった（3歳児60.3%、4歳児67.2%、5歳児78.8%、6歳児84.0%）（p.54 表1－2－1）。課外活動の種類としては、調査対象幼児の53.0%が「学習誌（ハングル、算数など）」による勉強を行い、その次に「絵画・造形教室」16.1%、そして「英会話などの語学学院」11.2%などが多くみられた（p.55 図1－2－1）。この結果は、英才教育の実態を調べた先行研究の結果とも類似している（金ヒョンジョン 2003、朴スジン 2001、李基淑 2001）。

このようにソウルにおいて学習誌が普遍的に使用されている理由は、学習誌の購買者である親すなわち、母親たちの口コミおよび販売員や周りの他の親などを通して気軽く接することができることと、学習誌の購買価額が安いことが大きな理由である。そして、小学校の学習と関連した基礎能力の向上に役立つと思われているからだと考えられる。

韓国では学習誌とともに、ガーベ（恩物）、積み木、モンテッソリなどが母親たちの間で流行している。それはこのようなプログラムも学習誌同様に、教師がガーベ（恩物）やブロックなどの高額の教具を持ち、直接幼児のいる家庭に訪問し、幼児たちにプログラムを提供するからである。

（3）メディアとの関係

幼児たちは「ほとんど毎日」テレビを視聴し（79.2%）、「ごくたまに」ビデオとDVD（VCD）を見て（「ビデオ」40.5%、「DVD（VCD）」21.2%）、57.5%の幼児が「ほとんど毎日」絵本を読んでいる。学習誌による勉強は、「週に1～2日」25.1%、「ほとんど毎日」21.4%、「週に3～4日」16.7%の順であった。しかし、ゲームの場合には、「ぜんぜん使わない・使わせない」が28.2%で、「ごくたまに」するという回答が12.7%であった。パソコンの場合は、「週に1～2日」使用するが20.3%、「ごくたまに」使うが22.2%であった。また、学習開発用機器や知能開発玩具の場合、「家にない」という回答が23.8%であり、「ごくたまに」使用するという場合も21.2%であった（p.170 基礎集計表）。

ソウルでは、DVD（VCD）の使用頻度に関する項目で「無答不明」が多かった。その理由は韓国のDVD（VCD）の普及率がまだ0.2%にすぎないからだと思われる（韓国経済新聞 2000）。また、幼児用を含む多様なDVD（VCD）タイトルがアメリカ、日本、中国などに比べ、普及されていないことに起因しているかもしれない。

さらに、研究の結果によると、韓国の幼児は多くの時間、パソコンをしながら過ごしていた。先行研究によると、韓国の幼児はコンピュータを使用する際、娯楽用CD（58.4%）、学習用CD（16.7%）、インターネット（16.8%）などで使っていることがわかった（金ヒョンジョン 2003）。

テレビ・ビデオ・DVD（VCD）の視聴時間をみると、1日のうち、テレビは1日に「1時間台」が28.5%、「2時間台」が27.0%、「3時間以上」も33.0%で、約9割の幼児が1時間以上テレビを見ていることがわかる。また、ビデオは「1時間」が30.1%で最も多かったが、DVD（VCD）は「30分未満」が19.6%で最も多く、「無答不明」が51.2%であった（p.171 基礎集計表）。

テレビやビデオを見るときの幼児たちの様子については、「見ているとき、家族の方と目をあわせること」では「よくある」が41.5%で最も多く、「見ているとき、家族と一緒に歌ったり踊ったりすること」と「見ているとき、内容について、子ども自身がお話をすること」では、両方とも「よくある」という

回答がそれぞれ44.1%、55.9%と最も多かった。「見終わった後、家族と内容について、話をすること」では「ときどきある」が35.7%、「よくある」が34.7%の順であった（p.172 基礎集計表）。

このような結果からは、テレビとビデオを含めた電子機器を使用するとき、比較的両親や家族とかかわりを持ちながら見ていることがわかる。

２．子育てと教育に対する母親の意識

（１）子育てで重視していること

母親たちが、実際の子育てでどのような内容を重視しているのかをみると、「とても重視している」で最も多くの回答があったものは、「基本的生活習慣を身につけること」65.8%、「自然とたくさんふれあうこと」59.3%、「親と過ごすこと」55.9%、「身体を丈夫にすること」72.2%、「他者への思いやりを持つこと」60.6%、「関心や才能を支援すること（体験活動など）」49.1%の項目であった。また養育時に「まあ重視している」比率では、「屋外で遊ぶこと」が64.9%で最も多く、「数や文字を学ぶこと」60.9%、「外国語を学ぶこと」57.6%、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」65.2%などの項目が示された（p.172 基礎集計表）。

（２）子どもに将来なってほしいと思っている人物像

将来、子どもたちにどのような人になってほしいかについての質問では（p.73 図２－２－１）、「自分の家族を大切にする人」になってほしいという回答が69.2%で最も多く、次に「リーダーシップのある人」が46.8%、「精神的に余裕をもってゆっくり生きる人」（東京、北京、上海、台北では「のんびりと生きる人」となっている）が32.2%、「まわりから尊敬される人」が28.3%、「他人に迷惑をかけない人」が24.7%、「仕事で能力を発揮する人」21.2%、「経済的に豊かな人」が20.2%の順であった。

ソウルの母親が「リーダーシップのある人」という項目を多く選択した理由としては、韓国の社会、政治、経済など、各分野の変化と関連しているようである。現在、韓国では政治、経済分野において世代交替が行われているので、新聞、メディア、インターネットなどのマスメディアにより、リーダーシップと関連のある談論が多く提起されている。また、歴史上（古典）の人物を基にしたテレビドラマが流行し、古典人物らのリーダーシップが現代で再解釈されている。代表的な例として、平均 22.1%の視聴率を記録した李舜臣将軍を主人公とする大河史劇が多様な階層の視聴者より多くの支持を得、以降李舜臣将軍のリーダーシップに対する各種の書籍が出版された。

そして、ソウルの母親は東京、北京、上海、台北の母親たちとは異なり、自分の子どもが「精神的に余裕をもってゆっくり生きる人」として成長することを希望している。これは現代資本主義社会がそうであるように、韓国社会も競争的で成就志向的な社会であるため、幼児期から子どもたちが各種の競争にさらされることで、母親たちは逆に子どもに対して、精神的に余裕を持てるおとなに成長してほしいと願っているのではないだろうか。

（３）教育観と課外教育費

子どもをどこまで進学させたいかという質問では（p.77 図２－４－１）、「大学卒業まで」が50.0%で最も多かったが、「大学院卒業まで」も46.0%あった。

すなわち、大部分のソウルの親たちは、子

どもたちが大学卒業以上進学することを希望していることがわかる。韓国はアジアの諸国がそうであるように、教育熱がとても高く、高学歴社会である。現在韓国では、大学卒業の青年たちの就業難が社会的に大きな問題となり、青年失業という用語まで生まれてきた。このような就業難が深刻化し、求職者たちの自己能力を見せる道具として学歴を利用しようという趨勢が強まり、さらに上の段階の学校への進学率が高くなっている（朴ソンジュン、2005）。そして、社会的な圧力が幼児をもつ親たちにも影響を及ぼし、韓国の幼児の親たちは他の諸国に比べ、子どもの超高学歴への志向が強い傾向にある。

また、１か月間に課外活動にかかる費用（幼稚園・保育施設にかかる費用を除いた、1か月あたりの塾・習い事（個人レッスンを含む）・絵本・玩具にかかる費用）は、回答者の26.5%が「５～10万ウォン未満」であると回答し、「３～５万ウォン未満」が19.7%、「10～15万ウォン未満」が17.3%の順であった（p.174 基礎集計表）。

これを都市の平均月収に対する割合でみると、所得の約２～３%を子どもの課外活動費用に使用していることがわかる。

（４）子育てに関する意識

母親の子育て意識について調べた結果は次のとおりである。子育てへの肯定的な感情についての項目をみると、「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだと思うこと」「自分の子どもは結構うまく育っていると思うこと」「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」に、それぞれ64.7%、50.8%、60.9%の母親が「よくある」と回答し、「子どもと遊ぶのはとてもおもしろいと思うこと」では、「よくある」が38.9%、「ときどきある」は50.2%が回答した。「子育てによって自分も成長していると感じること」についても、「よくある」が40.7%、「ときどきある」は42.2%の意見であった。一方、子育てへの否定的な感情についての項目をみると、「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」や「子どもに八つ当たりしたくなること」という質問では、「あまりない」がそれぞれ36.3%、37.2%の回答があった。しかし、「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」や「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」では「ときどきある」が、それぞれ51.6%と41.2%であった（p.175 基礎集計表）。

母親たちは、現在の生活において「まあ満足している」が68.3%であり（p.83 図２－６－１）、現在の子どもの成長の姿に対する満足度も「まあ満足している」が62.5%で（p.84 図２－６－２）、大部分が現在の自分の生活と子どもの成長に満足している。

子どもの性格について質問した結果、大部分の母親は、子どもは屋外で遊ぶことが好きで、積極的に好きなことをし、自分の意見を貫いて、だれとも仲良くし、友だちと一緒に遊ぶことを好み、人と話すことが大好きであると思っており、家で遊び、おとなの言うことをよく聞き、遊び方をそれなりに工夫していると思っていた（**表１**）。すなわち、母親たちは子どもたちを非常に肯定的に認識している。「がまん強い」「１人で遊ぶのが好き」などや「ものごとにあまりこだわらない」という質問には、「あまりそうではない」という意見が多かった（p.181 基礎集計表）。

母親が子育てに関してどのような考えを持っているかをたずねた。子育てと自分の生き方について、母親は、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」という意見が52.7%であり、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」という意見も45.7%であった（p.70 図２－１－１②）。

このような結果は、ソウルの母親たちが子育てについて肯定的に考えていることを示し、同時に母親役割以外の一個人としての自己実現も重要視していることを示している。これは韓国の既婚女性の社会・経済活動への参加の割合が高くなっている傾向とも関連が

あると推測される。この２つの役割が同時に求められると、母親としての役割がさらに優先視されているという点は、金ミシュク（1993）が指摘したように「韓国社会は夫婦中心である西欧社会とは違い、子ども中心の家族形態であり、女性に与えられたさまざまな役割のなかで、母親としての役割が最も重要であるという社会の雰囲気」（尹テクリム、1996）がよく反映されている結果であるといえる。

子育て観についてたずねたところ、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」という意見が74.9％で、「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」という意見の24.1％よりはるかに高かった（p.70 図２－１－１①）。回答した母親の31.0％が「常勤（フルタイム）」、または「パートタイム」で働いている母親であるという点を考慮すれば、母親の就業の如何にかかわらず、多数の母親が幼い年齢の子どもには母親が直接育てたほうがよいと思っており、これは子育ての主な責任者は母親であるという社会的規範に対して、母親も同意していることを意味する。

子どもの教育については、「子どもの教育について、子どもの自主性を重んじるのがよい」が71.8％で、「子どもの教育について、親が判断して選ぶのがよい」25.4％という意見より高かった（p.70 図２－１－１④）。子どもの進学に対する意見では「大学進学や学校名にはこだわらない」という意見が57.3％だったが、「世間で名の通った大学に通ってほしい」という意見も41.2％であった（p.71 図２－１－１⑦）。子どものしつけに関しては、「わがままを言ったら、厳しくしかりつけるのがよい」68.1％で、「わがままを言ったら、分かるまでやさしく言い聞かせるのがよい」30.0％であった（p.71 図２－１－１⑤）。昔から韓国では、厳父慈母という言葉があり、これは厳しい父親と慈しみ深い母親を意味する。しかし、核家族化が進み、家庭内の母親の影響力が相対的に増加する現代社会では、慈父厳母のタイプが多くなっている。また、韓国のことわざには「可愛い子には鞭をもう１回、憎い子には餅をもう１つあげる」がある。これは、韓国における育児の価値観として、両親のうちだれかは厳しい役割を果たすべきであり、子どもへの愛とともに厳しい教育も大変重要視されていることをあらわしている。

子どもの能力に関する質問では、「子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせると思う」という意見（92.7％）が、「子どもは生まれつき能力が決まっていると思う」という意見（5.9％）より圧倒的に多かった（p.70 図２－１－１③）。先天的な能力より後天的な環境が及ぼす影響を重要視しており、母親のこのような考えは、この調査で示された幼児たちのさまざまな早期教育の取り組みに反映されていると思われる。しかし、子どもの早期教育に関する質問では、「文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるのがよい」85.2％が、「文字や数はできるだけ早く教えるのがよい」13.6％の回答よりはるかに高い結果となった（p.71 図２－１－１⑥）。

■表1　子どもの性格

（%）

	東京（1007人）	ソウル（941人）	北京（992人）	上海（935人）	台北（2259人）	最大値ー最小値
自分のやりたいことは積極的にやる	95.1	91.8	93.3	95.5	96.1	4.3
友だちと一緒に遊ぶのが好き	93.1	93.8	92.6	92.9	95.7	3.1
外に出て遊ぶのが好き	92.1	87.8	93.2	94.1	97.6	9.8
人と話をするのが好き	91.3	78.2	83.5	86.6	92.4	14.2
自分なりに工夫して遊び方を変える	85.5	83.9	84.9	89.6	88.3	5.7
自分の意見を通す	81.6	78.7	86.6	89.7	92.9	14.2
家の中で遊ぶのが好き	81.5	67.0	69.9	76.4	87.1	20.1
おとなの言うことをよく聞く	72.4	76.8	58.0	57.8	71.6	19.0
誰とでもすぐ仲よくなれる	71.9	69.4	80.9	81.5	86.3	16.9
がまん強い	54.6	41.8	54.1	54.8	57.0	15.2
ものごとにあまりこだわらない	53.4	46.6	76.5	72.7	80.2	33.6
１人で遊ぶのが好き	42.8	22.8	27.1	28.3	46.0	23.2

注1）「とてもそう」＋「まあそう」の%。
注2）――は都市別にみたときの最大値、-----は最小値を示す。

３．父親のかかわり

（１）父親の帰宅時刻

父親の平均的な帰宅時刻は、「20時台」が19.4%で最も多く、次に「21時台」が15.9%であった。「22時台」も11.6%であった（p.87 図３－１－１）。

本調査で家族の夕食時刻が「19時半頃」であったことを考えると、幼児たちの夕食が父親と別々であることを示している。

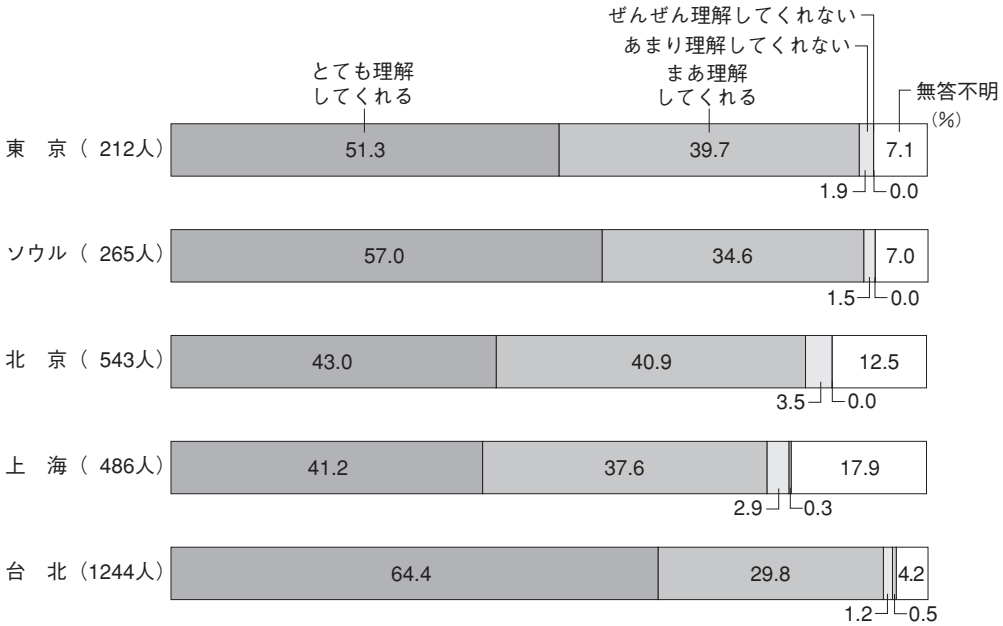
（２）父親の家事および育児への参加実態

父親が日常生活でどのような家事、育児をしているのかをみると、「子どもが病気の時、面倒を見る」では「ときどきする」が最も多く、「買い物をする」57.0%（「週に１～２回する」比率、以下同様）、「掃除をする」45.2%、「ごみを出す」41.3%、「子どもと一緒に外で遊ぶ」53.4%、「子どもを叱ったり、ほめたりする」43.1%では「週に１～２回する」が最も多かった。しかし、「食事のしたくをする」65.2%、「食事の後片付けをする」50.5%、「子どもを寝かしつける」42.9%は、「ほとんどしない」が最も多い回答であった（p.177 基礎集計表）。

働く母親の仕事についての父親の理解度をみると、大部分の父親が理解している。すなわち、父親は「とても理解してくれる」57.0%と答え、「まあ理解してくれる」という回答も34.6%であった（**図１**）。

■図１　夫の仕事への理解度

●夫はあなたが仕事を持つことをどの程度理解してくれますか



注）常勤者、パートタイムの母親の回答のみ分析。

（３）父親の家事および育児への参加の満足度と希望

父親の育児参加に対する母親の満足度は次のとおりである。母親は、47.3%が「まあ満足している」と回答しており（p.94 図３－３－3)、父親が育児にもっと参加することを望むかという質問でも（p.94 図３－３－４)、「まあそう思う」という回答が58.7%と最も多かった。

また父親たちの家事参加に対する満足度においても、45.8%が「まあ満足している」と回答しており（p.94 図３－３－１)、もっと家事に参加することを望むかという質問には、「まあそう思う」が53.1%と最も多くの回答があった（p.94 図３－３－２)。

父親たちが育児と家事に参加する比率が過去に比べて増加しており、これに対する母親の満足度も過去に比べて高くなっていることが推測される。それにもかかわらず、父親たちにもっと育児および家事に参加してほしいと希望している母親の回答が多かったのは、いまだに父親たちの家事・育児への参加が母親の補助的な役割だけに限られているため、父親にもっと積極的で自発的な参加を希望しているのであろう。

４．子育て支援

（１）子どもの面倒を見てくれる人

母親が仕事以外で、家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）がいる（ある）かという質問に、64.9%が「いる（ある)」と回答したが、一方で30.1%は「いない（ない)」と回答している（p.98 図４－１－１)。実際、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）をみると、「祖父母や親戚」が73.8%で最も多く、次に「父親」が19.2%、「近所の人」が16.9%、「ノリバン・保育園」が14.７%、「ベビーシッター・お手伝い」が5.2%の順であった（p.101 図４－１－３)。

これによりソウルの社会では、急に助けが必要になったときには、家族や身近な隣近所で助け合いが行われていることがわかる。

（２）幼稚園と保育施設に対する母親の要望

子どもが幼稚園や保育施設へ行く時刻は、朝「８時半頃」から「９時半頃」までが全体の84.3%、「９時頃」が37.7%の回答があった。家に帰る時刻は、「14時頃」が全体の15.3%で最も多く（p.49 図１－１－７～８)、幼稚園は「14時頃」28.3%、保育施設は「16時半頃」15.4%という回答が最も多かった(図表省略)。

母親の幼稚園や保育施設への要望の中身をみると、「まあそう思う」比率が多かったのは、「認知学習を増やしてほしい」41.2%、「保育終了後、おけいこ事をやってほしい」43.3%、「集団生活のルールを教えてほしい」66.9%、「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」51.6%、「子育て相談ができる場所になってほしい」60.7%、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」44.1%であった。また「あまりそう思わない」比率が多かったのは、「保育の時間を長くしてほしい」50.1%、「家族が病気の時に、預かってほしい」43.8%、「自由な遊びを増やしてほしい」45.0%であった（p.179 基礎集計表)。

５．まとめ

以上の結果をもとにして、今回のソウルの幼児の生活アンケートで特筆すべき点は次のとおりである。

ソウル地域の幼児たちの１日は、午前７時半～８時に起きて22時以降に就寝することが示されたが、満４～５歳児たちに必要な睡眠時間が10～12時間であることを考慮すると、幼児期の健康と身体の発達のために十分な休息をとれるように、就寝時刻をもう少し早めることが望ましいと思われる。そして、ソウル地域に住む幼児とその家族たちは、生活のなかでインターネットとテレビ、ビデオなどの電子機器にかかわる活動に多くの時間を費やしていた。したがって、教師および両親を含めたまわりのおとなたちの指導および管理監督が求められる。

また、調査対象の72.6%が正規教育以外の課外活動（習い事）をしており、年齢が高くなるほどその割合も増加していた。幼児たちが最も多くしている課外活動は学習誌であったが、記述中心の詰め込み式の教育が幼児期に不適切であるという教育界および脳生理学分野の研究結果を考慮すると、韓国の幼児が幼児期にふさわしい教育と発達経験ができるように配慮することは急務である。

そして調査対象のうち、核家族の占める割合が全体の約70%にもなることがわかった。母親たちは、子育てに劣らず自分の生き方も大事であると思っている一方、子どものためなら母親は耐えなければならないと答えた。これは、夫婦中心の核家族である西欧社会とは違い、韓国社会では子ども中心の核家族形態が主流であり、女性としてのさまざまな役割のなかで母親としての役割が一番重要であるという社会の雰囲気が反映された結果であるといえる。

就業している母親は全体の約40%で、平均の帰宅時刻は18時から19時の間であった。父親の平均帰宅時刻は20時から22時頃で、家族の平均の夕食時刻が19時半であることを考慮すると、共働き夫婦とはいえ、帰宅後に子育ておよび家事に父親より母親のほうが多くの時間を費やしていることがわかる。また共働きについて夫がよく理解してくれるほうであり、夫の子育ての協力にもある程度母親は満足している一方で、さらに多くの協力を希望すると答えたことは、過去に比べて父親たちの子どもへの養育および家事労動に協力する割合が高くなったものの、いまだに子どもの養育および家事労動の主たる責任者が母親であり、これを夫と一緒に共有することを希望する結果と推測される。

これとともに、大部分の母親は満３歳までは母親が直接子育てをしたほうがよいと答えたが、これは子どもの養育の主たる責任者が母親であるという社会的規範に母親たちも同意していることを示しており、さらに保育施設に預ける際も、家庭で母親が養育するような質的に高い保育サービスを期待するものと推測される。最近、社会問題になっている低出生率と幼児期の子どもをもつ既婚女性の就業率が増加する社会状況を考慮すると、両親の期待する水準に応じた保育サービスの量的および質的な水準の向上が急がれており、これは個別機関ではなく国家レベルで政策的に推進していかなければならないものと思われる。

【参考文献】

李基淑　2001『創意的、全人的な人的資源を養成するための幼児教育革新』教育人的資源部。

金ヒョンジョン　2003「我が国における幼児の日常生活に関する研究」梨花女子大学校大学院博士学位 請求論文。

金ミシュク　1993「階級別家族と女性」 女性韓国社会研究会編 『女性と韓国社会: 韓国学時論』 社会文化研究所。

朴スジン 2001「幼児のいる親の早期・特技教育に関する実態分析研究」梨花女子大学校大学院修士学位請求論文。

朴ソンジュン　2005『青年失業の現況と原因の分析』韓国経済研究院。

尹テクリム 1996「生活文化の中における日常性の意味」『韓国女性学』。
ホンウンジャ 2001「母親の成就圧力と塾・学習誌の利用が幼児のストレスに及ぼす影響」梨花女子大学校大学院修士学位請求論文。